

伊香保志

卷二

ル 4  
4888  
2



門 4  
號 4888  
卷 2

伊香保志中卷目錄

○名跡

伊香保神社

醫王寺

上の山

關所跡

向山

湯元

物聞山

御蔭の松

温泉神社

天宗寺

伊香保八景

湯の澤

猿澤

金毘羅山

丸山

水澤山

伊香保志

天香樓或辛

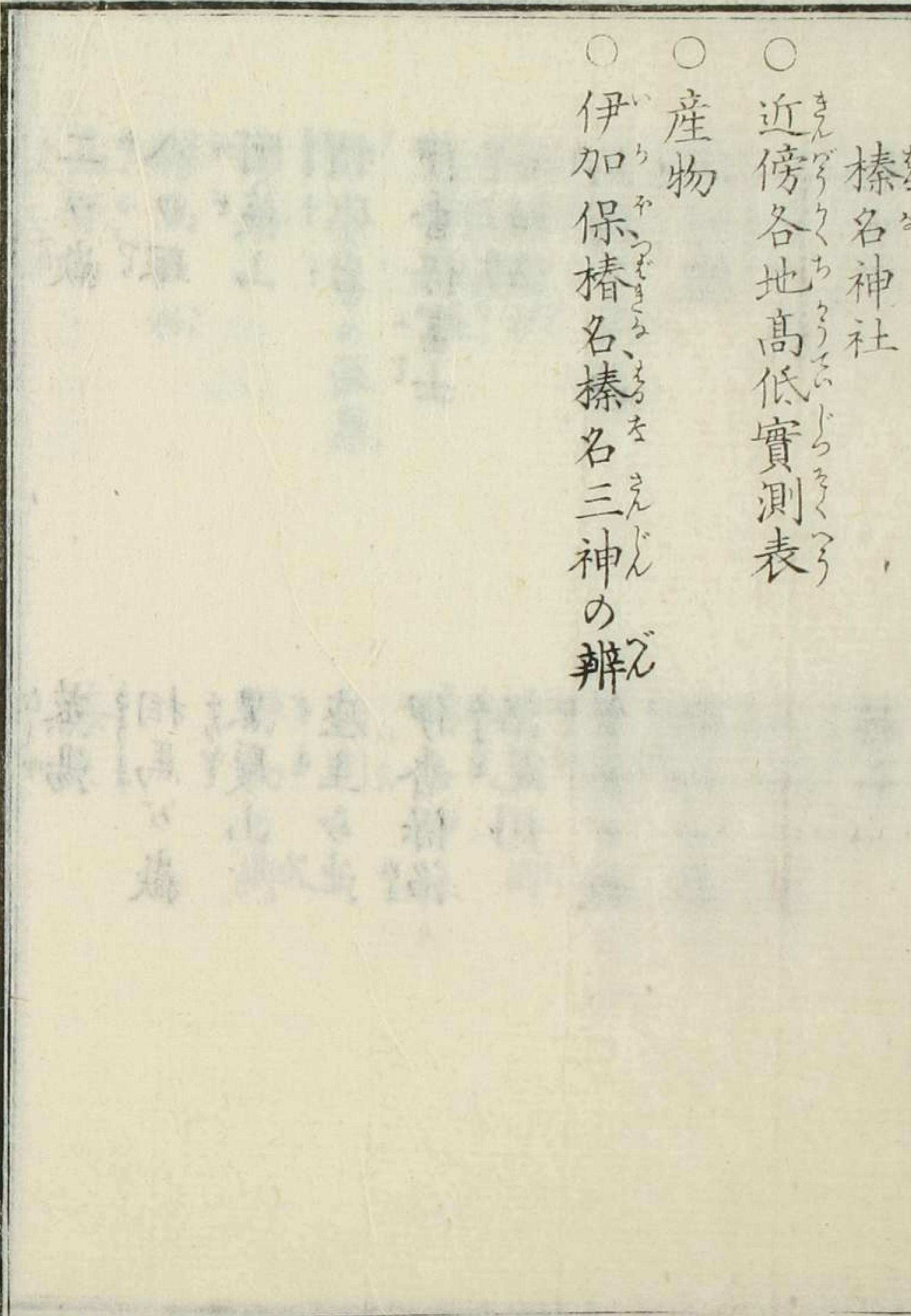


榛名神社

○近傍各地高低實測表

○産物

○伊加保椿名榛名三神の辨



中ノ月二

伊香保志中巻

東都 秋萍居士 輯

名跡

伊香保神社

伊香保の市街の南の上石段の第一高き處

子鎮座を群馬縣と社縣社とを古より國幣社と

郡中廿九ヶ村の郷社あり 近傍九ヶ村 祭る所乃神を大己貴

命にして毎年九月十九日大祭と維新の前を湯前大

明神と稱せり 湯前神号の事い未の三神の辨并 明治十一年

春焼失の後今尚假殿あり座せり 社地海面より高きこと二

千七百十六尺南より山を負ひ東北を打崩あつて遠くと越後境

伊香保神社

そのゆるる根の  
月を待たせり  
まのまのあり

博房卿

伊香保志中巻



高根

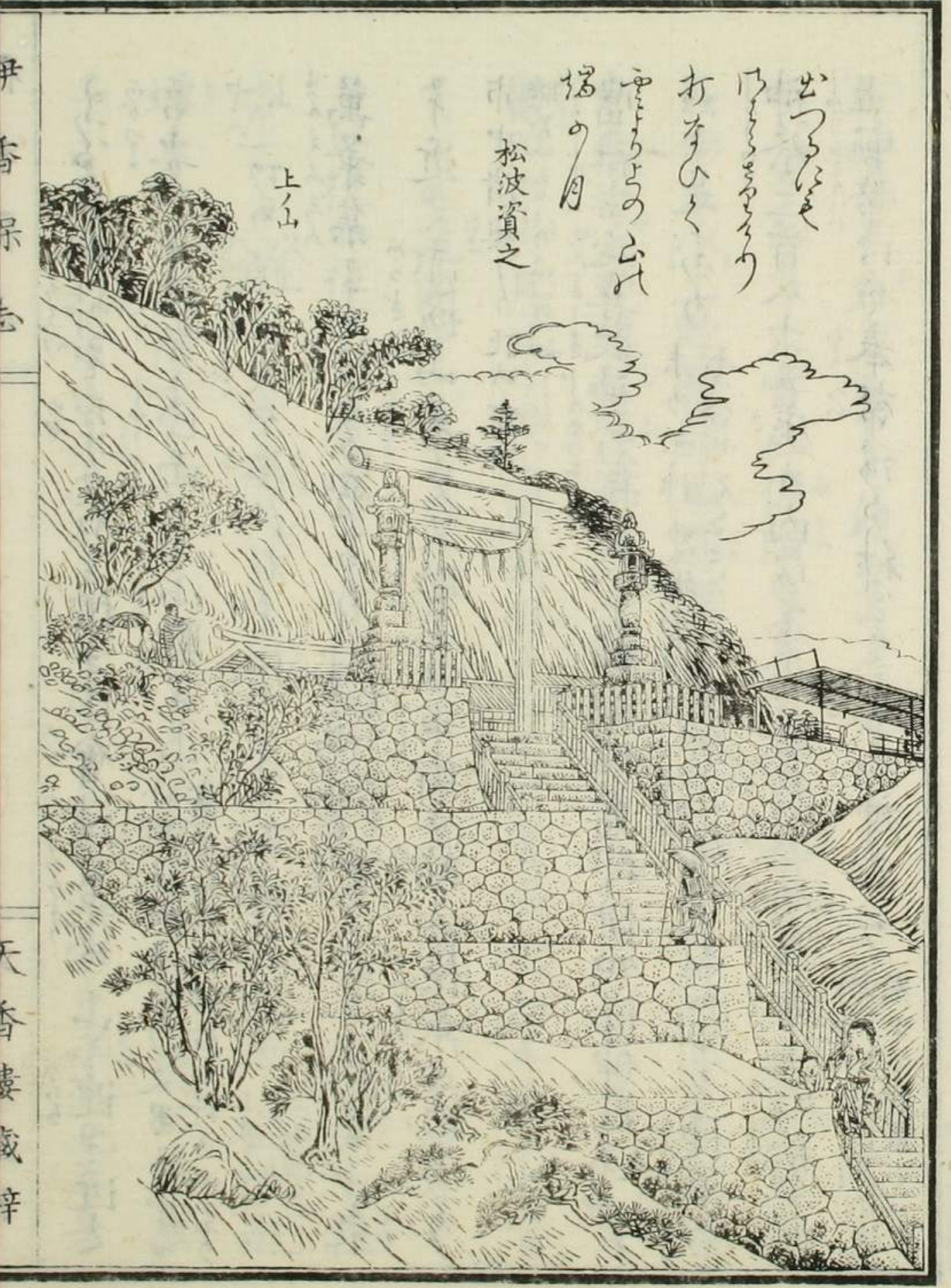
東時

甲一

出づる  
はらり  
打す  
ゆるる  
堀の月

松波資之

上山



三國峠を隔て右に續き會津日光の山と連り近と  
 吾妻川を隔て正面に小野子山 小野子村あり又男子山と書は和名抄郷名小野の地あり  
 万葉集に詠むる所あり 上巻の赤の  
 子近と赤城山見え又眼下を市街に臨み絶景の地あり

市中諸樓より北の方の眺望を皆此の如し

當社を延喜式神名帳より上野國群馬郡伊加保神社名神と

反る是なり 赤の三神の禊の 名神大座を以てるを神祇名  
 神祭二百八十五座の内は祈年月次新嘗等の御祭案  
 上官幣に奉幣する神あり 國司のその國に祭るを國幣といふ

名神と名をばしき神あり 大座小座を祭る座の  
 又當社位階の奉を續日本後祀承和二年九  
 月辛未以上野國群馬郡伊賀保社預之名神同六年六月甲  
 申奉授上野國無位伊賀保神從五位下又三代實錄より貞  
 觀九年六月廿日授上野國從五位上伊賀保神正五位下と  
 てその後同十一年十二月廿五日正五位上同十八年四月十  
 日以後四位下元慶四年五月廿五日正四位上と次第を授  
 ずらる 以上三代實錄 その後代々の朝より天下の諸神に位一級を  
 増すの文の諸書より見えたるを朱雀帝の天慶三年庚  
 子正月白河帝の永保元年辛酉二月崇徳帝の永治元年辛

酉八月、高倉帝の治承四年庚子十二月、後鳥羽帝の元暦二年乙巳三月、土御門帝の建仁元年辛酉二月、龜山帝の弘長元年辛酉二月、後宇多帝の建治元年乙亥七月、後圓融帝の永徳元年辛酉二月等あり

此の後も尚ほ一欽且以上の中辛酉ありと革命の御祈のありありあり

大の年、よく推せど伊賀保の神と建治元年子正一位ありたりと、まへに位階を授けらるるを人の位と異はして位田とを位の高下なりつるを田を給ふこと、所は成やがを神田とて寄附せらるる名目あり大座小座官幣國幣を以てぞ神の位よりわらざる也又上野國神名帳此の書の事未の三神の辨の下子をよとて正一位伊賀保大明神と祀せり又倭論語卷一神部

伊加保大明神と託上野國

わが國の直ま心せ人の國よと、のきらるる徳とあらはれり

以へり益人よ心しと直ま心せらるるまあびるるをいしと載せたり

倭論語と傳書ふれど

温泉神社 伊香保神社の攝社あり當村の社にして少彦名とくろやの神を祀る往時を薬師佛と配せ祭を薬師と称せり

此事未の三神の辨の書はあし 堂を伊香保神社の西に并びりしが炎上の後未再建ありて同神社の中子合せ祭々四月八日と例祭々上野國神名帳に群馬郡正三位温泉明神とあり

これありと以へり

湯泉山醫王寺

伊香保神社の石垣の下のり天正二年甲戌八月

筑前介安兼が草創あり天名宗に今別まて温泉薬

師と本尊より災後假堂あり湯前明神の別當湯泉寺の寛

社の際よりしが今廢永中創立して山の上伊加保神

香雲山天宗寺

市街の東北の入口より

曹洞宗あり武州郡骨波田村長泉寺末に

今河川の良珊寺より兼ぬ天心中木暮下總守祐利の開基

或と致後子孫の建るし天宗の字を考ふに開山を中山

良信和尚あり祐利の法号と興雲院天宗存心庵主より依

て寺号と火災の後未建立は當寺の門前天満宮より當村

る所ありしが焼けて再建ふし又是より今寺内より公立の小学校

の山は八幡宮より木暮八郎が氏神とて

上の山

町の南乃上にある山の名より伊香保の町を即此

山の中腹に家居せむはあり雑木生茂り嶮しく登り

難し八景の一なり月名あり

伊香保八景

八景を上の山乃月閣屋の雲猿澤の猿物聞

山の時鳥丸山のつじ高根の鹿二ツ岳の雪沼の杜若を以て

皆地名なり次々此八景の事何人の何時頃より定めたり

今知らるる詩歌も多く傳へし物聞山の時鳥と伊

香保の沼の所名草との歌の外を皆しく近き世の



詠あれど別子掲げを

關所跡 町の板せりつゝあたる處より今廢せしれを只門

の址を存せり 關屋の雪を八景の一と云ひ維新

乃前を三國街道あり金井驛 關所あり 小坂村との間あり

吾妻川水増して通行止まる所を高寄より當村を過る

西北あり五町田驛より出で又西北に極き吾妻川の上流 橋あり

みゆふる洪水も落ちた せ渡り原町驛より出で又東に

あり中野保驛尻高村と屬す三國道の中山驛より出づこれ

せ三國裏街道より一固り當地より番所せ没せられ村民

これ守りしあり 卷村民八氏

湯の澤 町の西あり深き谷あり西南あり二つ岳あり

谷の水を温泉の流流せり此より落ち北より流きて湯

中子村の下に沼尾川に入る

向山 湯乃澤を隔て西より山あり山の本名を一文子

といふ伊香保の町と相向へど向山の名より天保三年村

民福田某の南に所に土地幽邃風色好く玉兎菴を

以て酒肆あり 福田 鯉射鰻池は畜ひを客より供せ傍に

辨財天の祠ありふの谷を鬼谷といひ西の山を袋山といふ

此邊の山楓樹多く紅葉の名所なり伊香保より榛名へ趣

くと大の向山を過ぎ此より南小石の坂路 石坂と切通し

十二三町登りて榛原後子はかづ  
 猿澤 湯元路の中程を左の山より右ある湯の浮の谷へ水  
 の流を落つる處を以て往年を此道猴甚多かりしを以て  
 猿澤の猿八景の一あり

湯元 湯元路を町の上ふる薬沙堂の境内を過ぎ山の崖を  
 湯元を沿ひて南へ行きて前の猿澤を過ぎ尚南へ行くとあり  
 凡八町許にして小浜東南より斜に來りて湯元を落つる地  
 子湯本神社 薬師といふ所 所の社の迹今開きを遊園とせん  
 の小溪即温泉の流を以て沿ひ登ると二三町樹木  
 生ひ茂り兩崖のひたひたより温泉涌けり 涌口の事を上  
 巻の温泉の條

六の谷頭の地より近くと二の岳よりなる新道開けたる  
 十三四町に及ぶ至るべし

金毘羅山 頂より石の小祠あり琴平秋葉の神を祀るが故に  
 名々の町の東に峰の頂を峻しき坂を廻り登ると十町許  
 頂に樹木数株ありその處眺望奇絶よし北を越後會津日光  
 の山と連り東を赤城山の全形を見裾野遠く蟠延びて  
 頂常に白雲を吐く東南を當國の平野を望み利根川烏  
 川を白帯と引くがめく前橋高寄の市街其間を隠現し  
 てその先を武蔵より連りて極目際にして又願を伊香保  
 の市街と踵のりて見るとし

物聞山 藻塩草秋寐覚等物聞山を上野とあり和漢三

才圖會物聞山を伊香保よりあり上野志名跡考

等よを伊香保温泉の東南松茂屋山ありとあり依る

前の山に山の本名ありや夫木集の

伊勢の詠と名を今物聞山の時鳥を八景の一

や夫木集物聞山の歌あり

丸山 伊香保の町より十町許の麓の小高き岡あり樹木鬱

蒼々として中丸山稻荷の小祠あり数年前を参詣する人

地も荒此山の躑躅を八景の一と云ふ

今を失せり

御蔭松 伊香保より澁川路をぐる一里許ある路の右

の岡あり喬松一樹空を凌ぐり明治十二年 皇太后宮

温泉行啓の対する松の下に御野立あり村民後御蔭松と

稱し萬里小路博房卿の詠を楯取素彦君の文と成碑を

彫りて建つ

是中の松のやとりは

是歳己卯皇太后宮行啓伊香保温泉七月十七日

車駕發京往返由此道時屬盛夏掃松下以休車駕

焉既而土人建石命松曰御蔭松請博房卿之詠屬

余書題額博房卿以本官從駕余則管地方卿之詠

芝中  
御蔭の松  
吉野立の松と云



芝中の  
松のやう  
ふゆらけ  
あさき  
若の  
美うけ  
あさき

博房卿



余之題。皆不可辭者。碑成矣。併記其事於碑陰。亦出土人之意云。明治十二年己卯秋九月。群馬縣令揖取素彦撰并書。

水澤山 又淺間山ともいふ伊香保より東南一里水澤村の上

より此の山の東北の端より峰を登るを

遠くより望む この山ニツ岳と共に東京九段 頂まを三十町甚嶮

し頂より淺間神社あり 陰曆七月十三日近村の人登り指づるを略し

水澤觀音 水澤山の東乃麓水澤村の上より寺を五徳山水

澤寺といふ天台宗にて僧房を坂の下のり山門本堂僻地を

のりてを北壯嚴 寶曆の頃のあり本尊千手觀世音を坂東三

十三番札所の第十六番あり向ひて堂の左に板佛ありて

元亨四年三月廿日と記し左右に梵字を名づけありて

傍に六角堂あり立像の銅地藏佛 長六尺 六體を六面を

安しを輪轉せしむ 今盜と恐まを本堂に納む又寺の縁に伊香保姫といふもの像と載せたり

舟尾山 又不入とも書む水澤山の南谷と隔てあり低し昔

此山より巨刹あり傳教大師の開基せしむり今堂の入りて

山の南の中腹より遺跡あり又その頃を山中九九谷と唱

へる谷より僧房數百あり今よりその跡をりやて某この

地名残り文徳實録より嘉祥三年夏四月丙子詔しを上

野國聖隆寺を延曆寺の別院とすはとあるを今何地や

知らるる成を此寺あるべしといふ土人傳へ云千葉介胤心  
 常胤の長子あり建仁二年六十一没す此の山の觀世音より誓  
 當郡惣社より常胤の城址なりといふ  
 一子を得たるは佛託あり短命あるべしといふ寺僧は属  
 して山を置きて後胤にその子は會せんといふ山に入る僧  
 徒匿しそ出さば胤に怒りて山を攻めしり却て僧徒の為  
 子敗らる後胤に再舉るる遂に一山の堂坊を焼きたるし  
 たりといふ船尾祀といふ宇本一卷にりてその事と祀を安徳の多  
 し又山下の山子田村より今天名宗柳澤寺といふ山号  
 せ船尾山といふ即此寺と稱しといふなり  
 船尾の瀧 船尾山の東北なる崖の絶壁より落つ高さ二十  
 丈幅二間水烟四散しそ近づくば壯觀なり是より東

申ノ十

北なる瀧川の遠より遙く見え白布を懸けたる如  
 しといふ下流を瀧の海をいひて東に流れて利根川に入る  
 柏木より伊香保路を此瀧の海を渡るなりその  
 路ありとより瀧までを深の奥二十町なりなり  
 八坂の井手 萬葉集より八坂の井堰を詠める地を水澤村  
 より南の方八九町ある八坂といふる小坂の上より此船尾の瀧  
 の邊をいけて今井出野井出野入成を井出牟とつる字  
 一つらその舊跡を堰の跡といふなり  
 下巻の萬葉歌  
 森田堰 又新堰といふ即船尾の瀧の流を分ち引きて此より  
 東なる上野田村へ導ある水道あり天保年中上野田村乃

森田重信もりたしげのぶをいへる人官ひとつかみに請ひて開ひらく長さ千七百間せんしちひゃくしちばんあり村むら人ひと永とこく旱損あせあがりの患あまひを免まぬるをいふいふ滝たきの海うみの北きたの上うへにいている人古ふるの八坂やちかの井いの跡あとといふこと

湯上ゆのうへの鑛泉くわんせん 澁川しぶがわ驛えきの南みなみ三國さんごく街道かいどう湯上ゆのうへ村むら路ちより東あづまの平地ひらち

は涌もく冷泉れいせんは鑛氣くわんきなり古ふる老らう傳でん人ひと云い往むか古ふる此こゝの地ちは温泉おんせん

なり坊ぼくの村むらの名なは後のち伊香保いかけほの温泉おんせん涌もき出いでいり此の泉脈せんもく止とまり此の冷泉れいせんをその名な残のこりあり

有馬うまの郷ごう これも三國さんごく街道かいどうより有馬村うまむらの地ちあり和名抄わなごしりょう

國郡部くにぐんぶの郷名ごうなは群馬郡ぐんまぐん有馬うま 萬まん 少すくなり是こゝあり延喜式えんぎしき

左右馬寮さゆうばりょう上野かみの九牧くまうの中なかに有馬島うまじまの牧まきといひ拾芥抄しゅうがいしりょう牧名まきな

にも有馬の名のり

若伊賀保神社わがいがほほ神社 有馬村うまむらはゆり村むら内うち泰叟寺たيسうじの境内さかいうちの山やまに

鎮座ちんざす三代実録さんだいじつろくは貞觀五年十月七日授まか上野國かみのくに五位上ごゐじょう

若伊賀保神わがいがほほかみ從五位上じゆゐじょう同四年十月十四日授まか五位下ごゐげ伊賀保神いがほほかみ

賀保神がほかみ從五位上じゆゐじょう同四年十月十四日授まか五位下ごゐげ伊賀保神いがほほかみ

五位上ごゐじょう等見とうみといふ此の末すえの伊賀保いがほほの上うへといふ若の字なづなといふ上野國神名帳

日ひ總社相殿そうしやうだん十社じゆしやの内うちにいて一位いちゐ若伊賀保大明神わがいがほほだいめいじんといひ又

同書どうしよにいて四位しゐ下伊賀保水戸明神かみいがほほみづのめいじん五位下ごゐげ小伊賀保水戸

明神めいじん 共ともに有馬村うまむらの字なづな神かみ戸の五位下ごゐげ小伊賀保明神かみいがほほめいじん 水沼みづぬまの觀くわん

田の地ちあり從五位上じゆゐじょう伊賀保若御子明神いがほほわがみこめいじん等とうといふ載せる事ことありの

神と伊香保の号、ゆゑ見えざらんもの  
地古を皆伊香保の内ありしありべし  
桃井の郷 和名抄郷名より桃井毛々と、ゆゑ今の船尾山の麓

山子田村の遠所の舊地あり足利氏の頃桃井氏の一族此より  
起る城址ゆゑ 今桃井といへる郷名  
の區域此を甚廣し

井出の郷 亦和名抄郷名より見ゆ今高寄と柏木村との間あり  
井出村あり萬葉の八坂の井を此地歟ともいふ下巻萬葉歌の部

今村内より八坂稻荷井堤明神ゆゑゆゑ夫木集より  
井出の社ありあり此處りともいふあり

箕輪の城跡 船尾山の南東明屋村より又箕輪ともいふ  
あり箕輪軍記より抑此城を箕輪と申す事を榛名山乃

甲ノ十一

尾寄堀切築きたる城の南表を築き似たりと々名づけ

たり云々をゆゑ當城を大永年中長野伊豫守在原信業

長野を和名抄郷名にもいふ此地より南水御白川が築はしゆゑ

長野氏を鎌倉の管領山内上杉氏の長臣にして當國の豪

族あり信業の子信濃守業政忠勇衆より超ゆ天文二十

年上杉憲政當國平井の居城を北條氏康の爲りて落され

越後より奔る業政の後上杉謙信より属して北條と戦ひ

弘治永祿の間武田信玄此城を攻むること五年を歴せし

も業政常より防むて却く永祿四年業政歿し子右京大夫

業盛継ぐ同六年武田氏大舉して攻む業盛能く防はしが



遂に陥る後武田氏に属し瀧川氏北條氏に属し天正十八年に至り徳川氏井伊直政せこの城主と為し十二後直政高寄子後つて此城を毀つて郭堀門櫓等跡あり

椿名神社 箕輪の城址の東南八町許椿山といふなり九代祀子箕輪城を椿名明神山の尾寄より云々とあり延喜式神名帳より椿名神社

是より椿名大神宮といひ祭神を天照太神三輪大神西宮大神三社相殿といふ額より三輪大神といひと地名も上野國神名帳より後一位椿名大明神といひ

からめき温泉 相馬が岳の東南の麓西明屋村の山間より土人とガラ泉質詳ふは諸瘡火傷によりやうな温氣

中ノ十三

甚薄きがけより火に涌くを用人

白川 又相馬川ともいひ相馬が岳摺碓峠を谷この水落ち合ひより東南より流き車川も落ち合ひ南より流き白川村本郷村より烏川より入る

車川 榛名山の氷室谷より出て南に流き敷村を歴て全敷平村の南に至りて白川に入る

群馬郷 善地村車川の宿即その舊地ありやういひ和名抄國郡部より郡名郷名共より群馬久留末といひ榛名山元亨三年の鐵燈籠より車馬郡といひその後までを尚とらふといひしは今を字するといふおといひの或云久留末とを黒馬乃

義ありてし延喜式左右馬寮に上野國九牧とありて此國  
を牧馬と云ふ地名多しとあり前の有馬村

夫木部を神と云ふ人の里人を印とぬ川を渡らざる人

此利根川を今の前橋より利根分水廣瀬川

群馬の松 善地村の南十文字村 今を長野郷 宇長坂平といふ

変よりり元祿三年舊の樹を枯せしは今の松も大木也

今を今を高さ二丈餘東西十二間あり互る 十五番白岩觀音より彩

長谷寺 ○以下伊香保の西南より戻り記す

高根 伊香保町の西南湯の涌を隔て高と見ゆる山あり

樹木は二三十年前をこの山より麻多と伝みしを今より

高根の鹿と八景の一と云

榛原 伊香保より西南榛名山なる路を廣き高原にして

これに伊香保平といへり東南を二の岳相馬が岳西北を高

根西澤より限り西南伊香保の沼なるを凡二里許一

面の茅原をより萬葉集より岨の榛原と詠めらるを此をせ

指せらるるを古を榛といひの軟 榛原を榛といふといふ

或云水濱柏木堂の裾 夏秋の間草花多し

二の嶽 伊香保の南稍西即榛原の南よりり 水浮山、船

峯駱駝の背の如く西北あるを男岳といひ 稍より 東南あるを

女岳といふ 西南の陰より孫岳と 伊香保より迂路して林麓より

至る三十町、湯元より近路を行け山は樹木少く、瀕險し  
 女岳の頂より大なる孔あり、埋まを低き樹木せしむ、雪後へり  
 即大古火を噴き、孔を土人も此事を言傳へ、金山、花崗  
 石を焼け、割け、跡處に、ゆり火を東北へ噴きしと見え  
 山より東、凡伊香保の邊、二里四方の地、浮石地層を成せり  
 此噴火山の火漿を、知るべし麓の蒸湯も、硫黄氣殊  
 衣し、二の嶽の雪を八景の一、麓の蒸湯も硫黄氣殊  
 も常々、氷河り取り、市に出

蒸湯 女岳の東の麓より砂地の間に、蒸氣を噴く蓋し、温  
 泉あり、分量多し 現は、飲水を二十町南の、泉皆火脈の火氣

の為は蒸發せり、騰ると見ゆ、此湯古くを、以  
 前を大なる木屋も、浴者も常々数百人、し明  
 治維新の頃、大に近傍の樹木を伐り、又、二年の次、近  
 山大に荒れ、ことに夫より湯ぬる、ことに、六年  
 至りて、止後、樹木も再生、水脈も復したる  
 又、同十一年三月、至、地を掘り、土室  
 せし、丈餘の材を、打ち込み、多くの孔を穿ち、地底数丈、皆  
 蒸氣を噴き、上に、屋を覆ひ、中に、入り、密閉し  
 て、體を蒸せ、密閉の熱度、百十度、至、三十度、至る、泉質  
 詳し、硫黄の氣を、閉づると、稍久し、動

二ツ嶽

伊香保より西南十町  
飯多にあり  
女岳の湧き出づる古噴火  
の孔あり  
西岳の岩々たる山あり

雙峰積雪  
積雪埋深谷  
陰風吹不融  
誰圖炎夏日  
冷氣欲凌空  
勺水

男岳



二ツ岳の雪

梅麻一と梅の  
とくんととく  
とくんととく  
とくんととく  
とくんととく  
資之

女岳



ニッ嶽の麓  
蒸湯の景

朝討靈源出  
客房雄雄嶽  
下阪羊腸始  
知硫火煮泉  
處蒸氣浮浮  
穿地賜



依巖小屋似  
危樓  
誇說奇方引  
客留  
試入審中浴  
蒸氣  
淋漓熱汗滿  
身流

中洲



或ハ總魔トモ書ス

もそれど氣<sup>き</sup>息<sup>いき</sup>を多<sup>おほ</sup>くことわり依<sup>よ</sup>て近年<sup>きんねん</sup>を上<sup>うへ</sup>に氣<sup>き</sup>孔<sup>こう</sup>數<sup>すう</sup>處<sup>ところ</sup>と穿<sup>うが</sup>ちとある又別<sup>べつ</sup>に屋<sup>いへ</sup>を造<sup>つく</sup>り頭<sup>かしら</sup>部<sup>ぶ</sup>を外<sup>そと</sup>に吐<sup>はき</sup>體<sup>たい</sup>の蒸<sup>む</sup>すものりゆ<sup>ゆ</sup> 俗<sup>よ</sup>にゴクモン 今<sup>いま</sup>傍<sup>かた</sup>り浴<sup>ゆ</sup>戸<sup>こ</sup>四<sup>よ</sup>軒<sup>けん</sup>の近<sup>ちか</sup>村<sup>むら</sup>の者<sup>もの</sup>止<sup>とど</sup>宿<sup>しゆく</sup>して浴<sup>ゆ</sup>を多<sup>おほ</sup>くし 寒<sup>さむ</sup>湯<sup>ゆ</sup>浴<sup>ゆ</sup>とて冬<sup>ふゆ</sup>に來<sup>き</sup>り浴<sup>ゆ</sup>を 疝<sup>せん</sup>痔<sup>ぢ</sup>水<sup>みづ</sup>腫<sup>はれ</sup>り効<sup>き</sup>りゆ<sup>ゆ</sup> 伊<sup>い</sup>香<sup>か</sup>保<sup>ぼ</sup>の浴<sup>ゆ</sup>客<sup>きゃく</sup>一日<sup>いちにち</sup>の運動<sup>うんどう</sup>は來<sup>き</sup>り考<sup>かう</sup>多<sup>おほ</sup>し

ハツ塚<sup>つか</sup> 榛<sup>は</sup>原<sup>げん</sup>の中<sup>なか</sup>程<sup>ほど</sup>は南<sup>みなみ</sup>へ並<sup>なら</sup>び八<sup>はち</sup>の土<sup>つち</sup>塚<sup>つか</sup>のり寛<sup>かん</sup>文<sup>ぶん</sup>年<sup>ねん</sup>

中<sup>なか</sup>榛<sup>は</sup>名<sup>な</sup>との界<sup>さかい</sup>標<sup>ひょう</sup> まを築<sup>まか</sup>はしとのあり此<sup>こゝ</sup>をの字<sup>じ</sup>を見<sup>み</sup>晴<sup>は</sup>らしやいふふの岡<sup>おか</sup>の上<sup>うへ</sup>に大<sup>おほ</sup>岩<sup>いわ</sup>のり獅<sup>し</sup>子<sup>し</sup>岩<sup>いわ</sup>とゆふ

相<sup>さう</sup>馬<sup>ま</sup>の嶽<sup>たけ</sup> 又<sup>また</sup>相<sup>さう</sup>満<sup>まん</sup>或<sup>ある</sup>を驄<sup>そう</sup>馬<sup>ば</sup>と書<sup>し</sup>を二<sup>に</sup>ツ嶽<sup>たけ</sup>の南<sup>みなみ</sup>に谷<sup>や</sup>を隔<sup>へ</sup>て、ゆふの連<sup>れん</sup>山<sup>さん</sup>の中<sup>なか</sup>に最<sup>もと</sup>もく又<sup>また</sup>最<sup>もと</sup>険<sup>けん</sup>し巖<sup>いわ</sup>に鐵<sup>てつ</sup>鎖<sup>さ</sup>を

互<sup>たが</sup>ひ攀<sup>よ</sup>ぢ登<sup>のぼ</sup>るふの方<sup>かた</sup>より登<sup>のぼ</sup>る稍<sup>やや</sup>易<sup>やす</sup>し 伊<sup>い</sup>香<sup>か</sup>保<sup>ぼ</sup>より西<sup>にし</sup>に東<sup>ひがし</sup>に向<sup>むか</sup>ひ十<sup>じゅう</sup>町<sup>ちやう</sup>餘<sup>り</sup>ありて頂<sup>たかね</sup>より至<sup>いた</sup>る峯<sup>ね</sup> 南<sup>みなみ</sup>四十<sup>しじゅう</sup>餘<sup>り</sup>町<sup>ちやう</sup>まで

平<sup>ひら</sup>の将<sup>しょう</sup>門<sup>もん</sup>の石<sup>いし</sup>像<sup>ざう</sup>を置<sup>お</sup>け相<sup>さう</sup>満<sup>まん</sup>明<sup>めい</sup>神<sup>しん</sup>といふ六<sup>む</sup>尺<sup>せき</sup>許<sup>ほ</sup>の立<sup>た</sup>像<sup>ざう</sup> 髪<sup>かみ</sup>を被<sup>かぶ</sup>り劍<sup>けん</sup>を持<sup>も</sup>ち官<sup>くわん</sup>服<sup>ふく</sup>着<sup>き</sup>て恐<sup>おそ</sup>しき相<sup>さう</sup>あり 山<sup>さん</sup>名<sup>な</sup>より近年<sup>きんねん</sup>附<sup>つ</sup>會<sup>かい</sup>して頂<sup>たかね</sup>より四<sup>し</sup>方<sup>かた</sup>數<sup>すう</sup>十<sup>じゅう</sup>里<sup>り</sup>の山<sup>さん</sup>野<sup>や</sup>を望<sup>のぞ</sup>むべし 造<sup>つく</sup>り立てたるあり 相<sup>さう</sup>馬<sup>ま</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>師<sup>し</sup>團<sup>だん</sup>の傳<sup>でん</sup>へ云<sup>い</sup>千<sup>せん</sup>葉<sup>えつ</sup>介<sup>けい</sup>常<sup>じょう</sup>胤<sup>いん</sup>の次<sup>じ</sup>子<sup>し</sup>高<sup>たか</sup>井<sup>い</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>師<sup>し</sup>胤<sup>いん</sup> 養<sup>やう</sup>子<sup>し</sup>とあり相<sup>さう</sup>馬<sup>ま</sup>小<sup>せう</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>師<sup>し</sup>常<sup>じょう</sup>と稱<sup>しょう</sup>す 嘗<sup>かつ</sup>てこの山<sup>さん</sup>の頂<sup>たかね</sup>より遠<sup>とほ</sup>見<sup>み</sup>番<sup>ばん</sup>所<sup>しよ</sup>を置<sup>お</sup>きしが故<sup>ゆゑ</sup>に名<sup>な</sup>とゆふ

安<sup>あ</sup>蕪<sup>わ</sup>山<sup>さん</sup> 萬<sup>まん</sup>葉<sup>えつ</sup>より泳<sup>よ</sup>める山<sup>さん</sup>なり裾<sup>すそ</sup>野<sup>の</sup>も廣<sup>ひろ</sup>く歌<sup>うた</sup>より由<sup>よし</sup>りて

即<sup>すなは</sup>相<sup>さう</sup>馬<sup>ま</sup>の嶽<sup>たけ</sup>の一名<sup>いちめい</sup>ありといふ又<sup>また</sup>中<sup>ちゆう</sup>古<sup>こ</sup>に云<sup>い</sup>ふ其<sup>その</sup>輪<sup>りん</sup>の室<sup>むろ</sup>か

安藤の北と呼びしと云相馬が嶽を安藤山  
岳といふと畧轉せしと云相馬が嶽を安藤山

上野の安藤山を安藤山と云はしと云相馬が嶽を安藤山

夫木を安藤山と云はしと云相馬が嶽を安藤山

同 安藤山の中より出づる白川の川を安藤山と云はし

同 或云安藤山白川を肥後よりと云はしと云相馬が嶽を安藤山

萬葉の上野歌へかけられ集りしと云はしと云相馬が嶽を安藤山

地子白川より且親王を鎌倉に居たりしと云はしと云相馬が嶽を安藤山

然も其輪軍記に武田勢が城を圍ゆる状と云はしと云相馬が嶽を安藤山

北を安曾山相馬が嶽船方山船尾の誤

桃井が原野尻の嶽

山云といへば相馬が嶽とを別ある歟

黒髪山 北國紀行に堯恵が長野 前の箕輪の 乃陣所小野景

頼が陣に黒髪山と云はしと云相馬が嶽の別名ありと云はし

なる山の状ありと云はしと云相馬が嶽の別名ありと云はし

然も上野傳統雜記に伊香保の沼より西に硯嶽北に

黒髪山二ツ岳東に相馬が嶽といへば是亦別の山ありと云はし

いり上毛志料より伊香保黒上山をみのわの北ありといへば

堯恵を下野の黒髪山と云はしと云はしと云相馬が嶽の別名ありと云はし

摺碓岩 相馬が嶽の西より原の左の山乃上あり大巖といふ

巖は洞門のり岩の形摺碓に似たりと云はしと云相馬が嶽の別名ありと云はし

田舎ふて粗 売せと云はしと云はしと云相馬が嶽の別名ありと云はし

伊香保 伊香保 伊香保 伊香保

超々々東南箕輪の方より下り路より檜碓峠と云ふ此山の  
 南の麓より横は洞孔を穿ちたる跡有り往年高寄侯沼乃  
 水せ此より南へ道を箕輪を二三萬石の地と新開せん  
 せし沼尾川の下流ある村に岡寄の者難儀と申立てたりと云  
 廢止せし跡ありと云 次のスリバチ池も此時掘  
 座主の池 原の中、小富士の麓路の右より沿ひて方三丈許  
 の窪き地、いつも常に水は頼印座主 此の池の事頼印の事共々  
 聖以へる者の住みし地ありと云 土人此池をダスガ池と云  
 伊香保富士 小富士又沼端の富士と云 土人古言を存し沼に  
 無ふどゆひ又沼尾川の土人を富士山とのと云 沼端沼の  
 川口で沼の海と云 土人を富士山とのと云 路の右沼乃

東の岸より沿ひて、河の富士より似たり、其の麓  
 あり沼の汀は一畚山といふ小山あり土人怪しき説を傳へて  
 云往古鬼神、一夜にして此の沼と富士とを作ると功  
 一簣を虧き、一夜に成り、故にその一簣の土を覆す即  
 此の小山と云ふ也

伊香保の沼 古伊香保村より屬し寛文年中より榛名より  
 入る榛名の神の御手洗水と稱せ、東西十一町南も十七町周  
 三十五町西も山の麓を吾妻郡 十二ヶ村 へ屬せり古歌より多と  
 伊香保の沼の以のほして、又いづれの沼の、いづれ草と詠る  
 今沼の三方を皆山にして、東の麓の遠淺まで

伊香保 伊香保 伊香保 伊香保



伊香保沼

伊香保町より  
西南二里餘の伊香保富士  
山中より  
今榛名山のみくらりと  
以東西十一町南北十七  
町周三十五町

萬葉

と野ぬ伊香保の  
ほろ 植たふ多き  
ゆき ぬらんや

伊香保のけん

拾遺

伊香保のけん

以ののけん

いかに

鳥のけん

いかに

讀人不知



芙蓉低在水水面欲  
生香敢著新詞華古  
歌有古芳

勺水

路自香山登幾回春  
名嶽畔小湖開三旬  
慣聽溪泉響忽怪瀟  
戲岸下来

用先君香湯詩之  
韵 如雷大規修





傾かたむきく自みづか治ちの跡あとあり趣おもむけり座ま主ぬしが池いけあど其そのさ然しかり大湖たいこあり

こそ都みやこへも聞きえ烟あか人の傳でん賞しょうさる所ところもあわしなるべし

何時いつの吹ふきよの甚ししき早はや魅まりめて此このの沼ぬまを切き落おし尾お

川の落お口くち水みづを引ひきたる年としはゆし由よしと二十年にじゅうねん前まへ萬まん延えん二に榛しん名な

山の某ある院いんの僧そうあり聞きあり蓋おほ古こ傳でんありへし沼ぬまの狭せまくありし

も其その吹ふきよの事ことは冬ふゆはゆんとゆり

石垣いしがき沼ぬま 古歌こかありまゝ石垣いしがき沼ぬまを泳およみ藻も塩しほ草くさを踏ふき書かき石垣いしがき

沿よ上かみ野のとららに依よりて伊香保いさほの沼ぬまの異い名なありともゆし然しかど

も或あると赤城あかぎ山の沼ぬまありともゆし或あるは石垣いしがき沼ぬまを地名ちめいまゆしゆ

唯ただ岩石いしがきの四方よこあり垣かきのぬと峙たもとちるるにゆきありともゆし指さ

其所そのところを知らば石垣沼石垣山の説いしがきぬまいしがき山のいひ下くだ巻まきの山吹やまぶ日記に見みゆ

沼尾ぬまお川が 沿よの下くだ流ながし小富士こふじと烏帽子えがしが嶽たけの間まを東あむ

流ながる川が筋すぢより龍たとありて落おつる處ところ三ヶ處さんかあり其その大おほき

辨わ天てんの瀧たより頗おほ奇き觀かんありとが川が下くだを湯ゆの海うみの水みづを合あせ

東あ小岡こおか寄よ新田しんの下くだは吾妻川ごまづが入り川口がわを沼ぬまの川筋が群ぐん

馬ま吾妻ごまづの郡界ぐんがいとゆ

烏帽子えがしの嶽たけ 沼尾川ぬまおがを隔へて沿よの北岸きたがしよりゆり又冠山えがし或

加々鞠山かきまともゆし沿よの南みなより望のぞめど形風折かたちかぜ烏帽子えがしを似

左ひだりあり

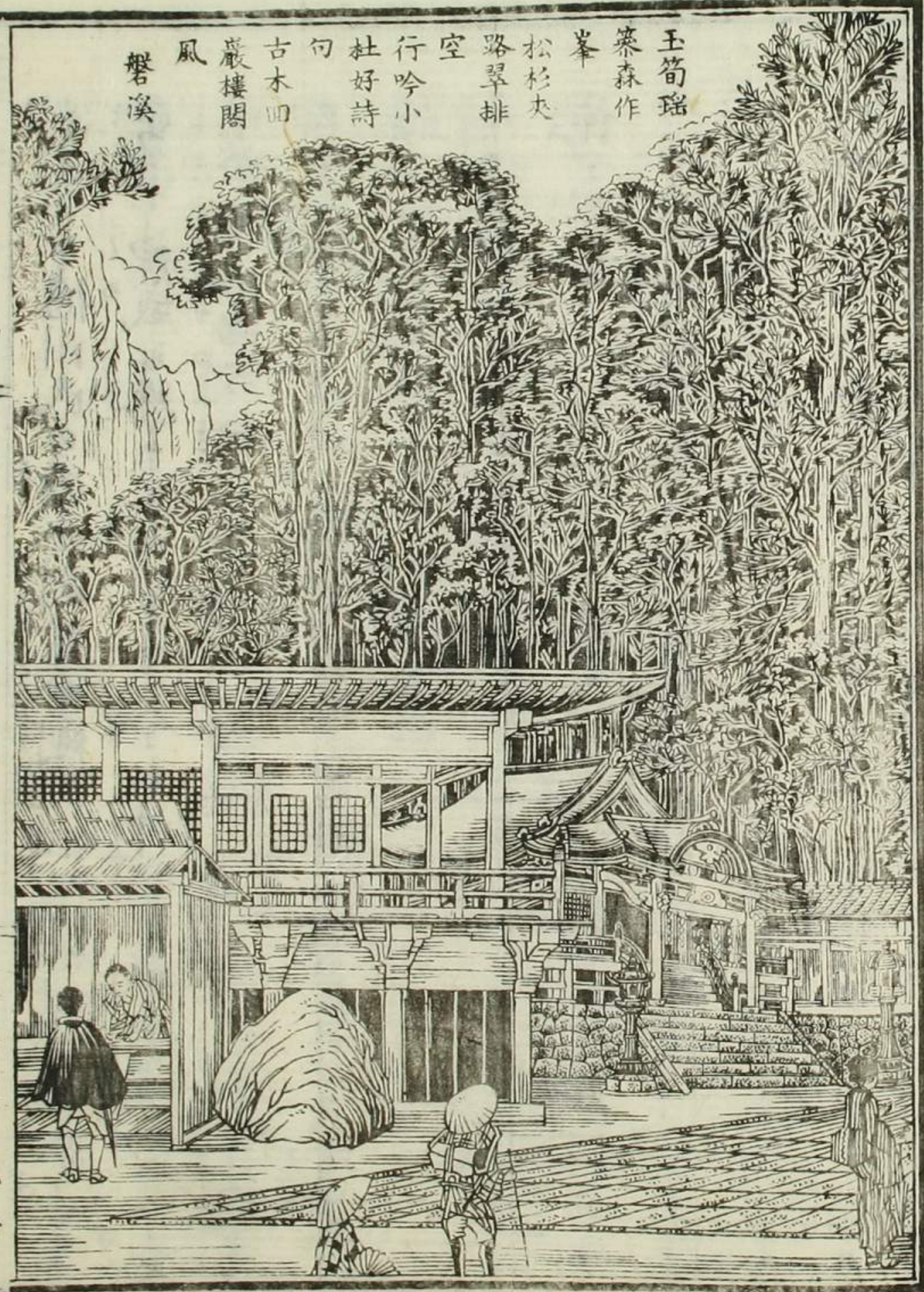
鬢かみ櫛かみの嶽たけ 烏帽子えがしが岳たけの西にしより並ならぶ形かたちの似にたるをりて名なとゆ



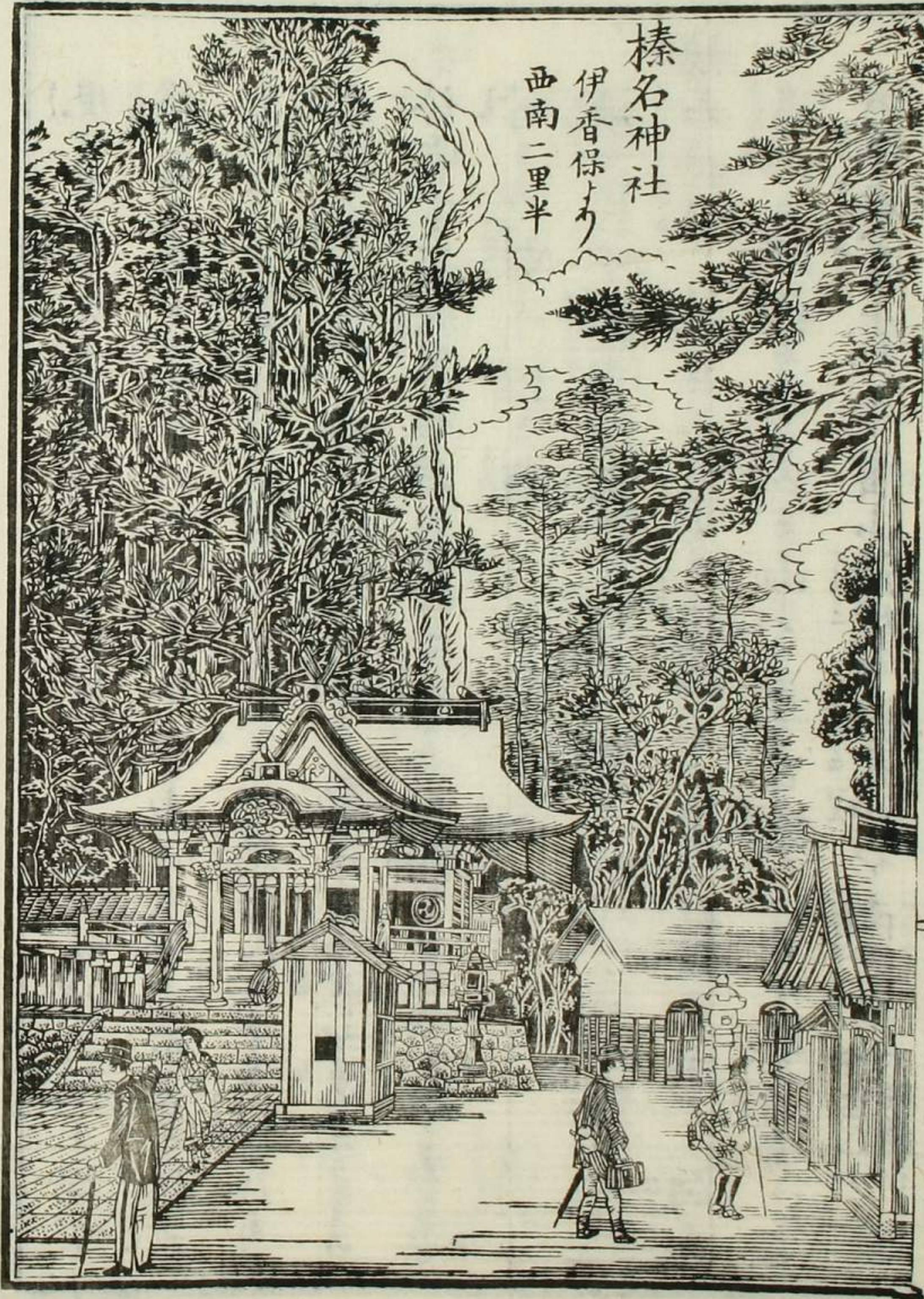
見ゆらせど湖水の澄きを一瓊鏡の如く鬚櫛あぶりの山之景  
 倒す水に映き風光言まん方冬し味よあり南へ嶮しき  
 坂とゆるごと十八町とし榛名の神社より多し峠よりわたり  
 沿ひをゆき硯岳と掃部岳との間を越えそ東に吾妻郡  
 の原町跡よりわづし又峠より南榛名へ下る路の半より右へ入る  
 掃部岳の地味を越えて  
 まと吾妻郡よりわづし

榛名山 當郡の西より連山の最西よりありて稍低く西を杏  
 岳より連る此山春名村より層を萬葉集より伊加保呂の  
 榛原とも詠みこれ古此の空の山より榛の樹多かりしより  
 しそ名起まるその嶽山より樹木多くと又奇巖怪石多し  
 珠子神社の石巖石並び立ち突兀やしく奇と怪々の形を

規ずありき者を柱の如く偉く松杉の梢乃上より出で  
 横ある者を梁より似て倒き谷水の上より架る若龍岩  
 と以らるる若龍を数積むつげ今や尚多んとする形あり  
 鞍掛岩といふを鞍の前輪を崖より懸けたる状を為せりその  
 外雷電岩大黒岩鎧岩龜岩瓶子岩獅子岩の如きも多し  
 皆その形より依り種々の名ありて数へ盡しけり溪にそ  
 潺々として脚より響きを松杉を鬱として天日と覆つあり  
 榛名山神社 榛名山の南の中腹よりあり社殿東南より向ふ  
 近地の郷社を古より三千百坊もあり繁昌しりしと  
 云後慶長十九年當山法度の御朱印を南光坊  
 東嶽山の  
 天海僧正



王笏瑤  
築森作  
峯  
松杉夾  
路翠排  
空  
行吟小  
杜好詩  
句  
古木回  
巖樓閣  
風  
磐溪



榛名神社  
伊香保より  
西南二里半

遣らるる徳川氏の政を別當金剛院山下里見村光東叡山明志兼好に  
 屬し神威も殊より著し今を神官の守る所とある本  
 社祭神元湯彦命といふ祭神の事委しく未の三創建年月社傳  
 共々詳ふべし社建久元年十二月榛名寺領云々の文書と  
 傳ふるのみ九月九日例祭と云  
 本社へ登る坂を石段折曲りて中段より雙龍門建つ  
 龍を彫り門の上より大巖高く峙つ形を以て瓊鉾石と  
 いふその外社地をたぐへ巨巖大石突兀として腕で立たる  
 如く圍をり登れば本社あり社の後より御姿石といふ  
 何れも高く空を衝きて聳え立ち中括きて上より頭を

覺しき形あり頂に幣立てり此の巖の下に社を作す  
 此の巖の中に神座を造りて本社拜殿神樂殿額堂  
 及び彫刻美を盡し丹朱金彩きらびやかにして以て莊  
 嚴あり鐘より文永五年二月十日大勸進僧栄園よりありと  
 云又額堂の前より鐵燈籠より上野國車馬郡滿行權現靈  
 前元亨三年云々とあり  
 石段を下りて下より茶屋あり右の路を即伊香保路とす  
 裏門關所の跡あり右を總門の方へ到る路の左を谷川を  
 神橋と渡まざる路の左右より岩あり其の間を僅に二尺許あるを  
 袖摺岩といふ三重の塔あり此の堂は年々舊き杉林生ひ立つ

千本杉といふ又槁と波を随身門田の仁及び紫銅の鳥居  
 あり下を春名山村あり神人の家左右に並ぶり高師町  
 とりふ三十六戸今町を坂を東に連る村を下を松杉  
 路を夾み直々として雲を衝ちり障路を西南ある三野倉子  
 至る二里本路より又東南を明屋村箕輪古道ふる南を室  
 田村より下る路も河内共各三里

各地高低表

伊香保近傍各地の海面よりの高さを左の如し  
 年夏小林一知君の實測せる所ありと云  
 晴雨針觀測バロメーターより  
 尺ハ日本曲尺あり  
 高崎驛本町 二百六十尺 即四十三間二尺

水澤觀音堂上	二千。三十九尺	即三百三十九間五尺
伊香保 <small>千明三郎屋敷</small>	二千五百六十三尺	即四百廿七間一尺
同 湯澤谷底	二千四百五十一尺	即四百。八間三尺
同 向山	二千五百十四尺	即四百十九間。尺
伊香保神社	二千七百十六尺	即四百五十二間四尺
同 金毘羅山	三千。四十三尺	即五百。七間一尺
同 湯元	二千八百三十九尺	即四百七十三間一尺
二ッ岳蒸湯	三千五百廿七尺	即五百八十七間五尺
八ッ塚 <small>榛名路春名村界</small>	四千。廿八尺	即六百七十一間二尺
伊香保沼水面	三千六百七十二尺	即六百十二間。尺



天神峠

三千八百五十五尺

即六百四十二間三尺

榛名神社

三千〇七十五尺

即五百十二間三尺

産物

伊香保の産物の第一やまを所を即温泉にして一村實これ  
 子依る生で當りて製造の産物少く湯花漆といふを  
 綿布と湯澤にて漆む色赭黄とある腹腰子絡ひて功能  
 やいり又鏡の拭粉と製を砥の粉と天花粉やを製し別  
 奉書紙と温泉より浸し乾して揉むるは拭ふる能く細  
 鏡の光を生ぜしむやいふその外は湯晒艾のり又近き山の雑材  
 せ用るを挽物細工して高ふ店多し山下の畠子植うる大根を

中ノ二十九

物聞山の時鳥

伊香保町の東南  
 八町を河川俗子  
 コニヒラ山といふ八景  
 の一とす

夫木集

伊勢

以のなる相け山の  
 一はくたす  
 一はくたす  
 まゆたす

何來新社宇啼破嶺頭雲  
 借問隣樓客一聲聞不聞

磐溪



大ありその他小麦粟糝蕎麥いりのみ冬を氷蕎麥切氷  
 豆腐など製を凡市中日と食用料理の魚鳥穀菜心果等皆  
 近村より来りその他雑種の食用日用品を皆高寄より来る夏  
 そ是等の品々の需要莫大なる事あり

近傍の山々草木禽獣等の珍奇とまきりの甚希あり蛇  
 蔴草草烏頭耬斗菜等あり萱草の一種花の一重ありの  
 て食ふべしと云外伊香保の沼のいよめ草、ゆり園の如し秋の  
 風雨の後多く生香草出づ山林の檜栗かしたまき生るその  
 外近き山々花草多く林を殊麗し物聞山の鶉名を慈悲  
 心鳥を鶉子花ならし啼き泣き止む鶉多し味美あり

中ノ三千

伊香保の沼のいよめ草を写生

八景の一と沼の在の汀に  
 多く生る古歌多し小巻に  
 狭し田中芳男君云花戸はカマヤマアヤメといふものありと岸田吟香君  
 は古歌子ゆゑハナカツミに深山多し今ハナニヤウブといふこれ  
 里子移し養ひしに葉の菖蒲に似たれば名とせざるありといへり

拾遺愚草

知衣のいよめの  
 うつまおぬく  
 わやんをそひく  
 定家

文人記靈窟勝概  
 各相誇雲客殊其  
 賞艶稱杜若花  
 耕堂楳取縣令





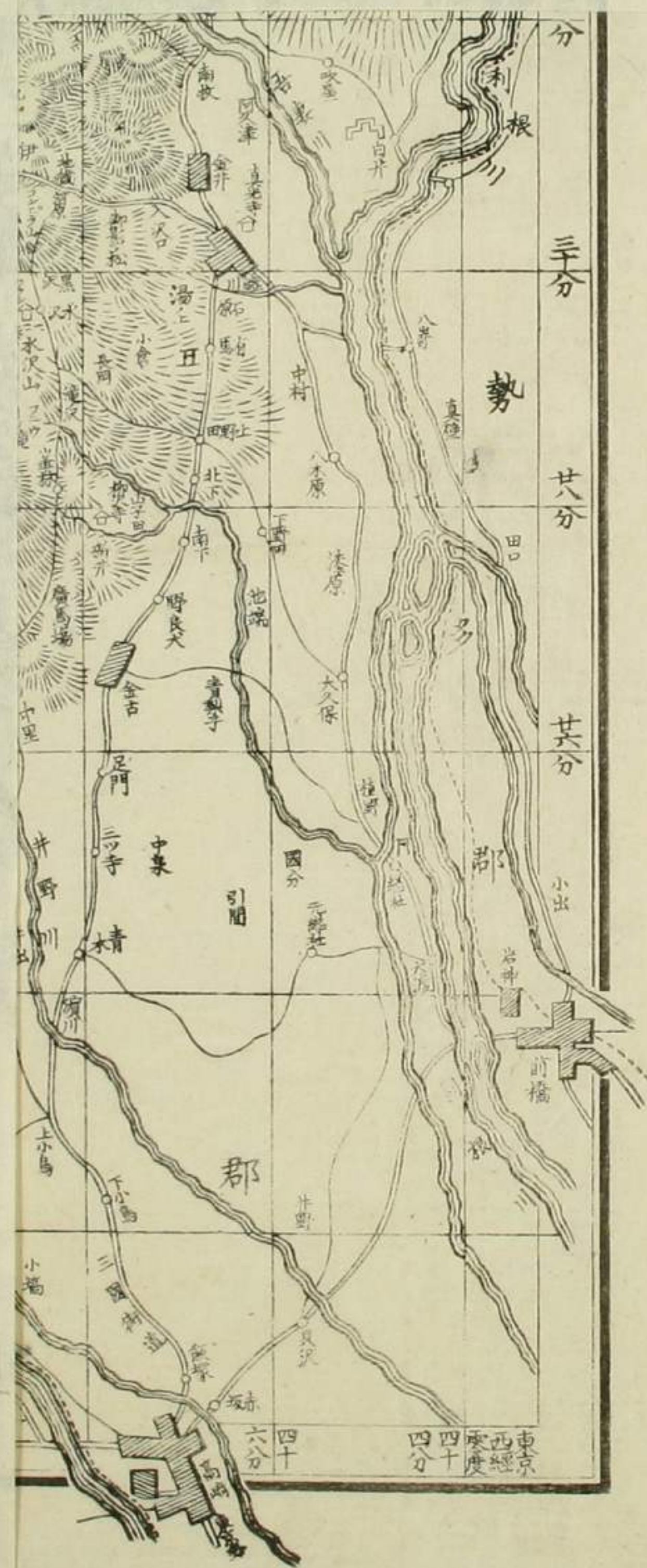
ノヤ解きつゞけ又椿と榛の書換ありやうも當らば頭注の  
説き都人の遠地の地理を知らぬ推量ありし椿名の神は今も  
箕輪の椿山子座しその地名より又榛名を榛原子因  
ゆれどもやう各別ありし又榛名の神を大成経の説は據  
りて元湯彦命ありし此神の事 箕輪の椿名の神は天照大神  
三輪大神西宮大神は祭神にして古し又當國甘楽郡一の宮や  
群馬郡総社とあり古く傳へらるる上野國神名帳や名づくる  
ものなり これと書體中 群馬郡子正一位伊賀保大明神、後一位椿  
名大明神正一位榛名大明神を分ち載せたり又或説く式の伊  
加保の神と今の榛名の神は三代實録より若伊賀保の神と

今の伊賀保村子座す神をせるゆり是等書にき妄説あり若  
伊賀保を今現は有馬村子ゆりその名を定めて伊加保椿名の二神  
その名久しく埋むる榛名ののみ印あり著きそのゆりたるゆ  
ゆりたる今此子余が辨て述ぶ然もゆり固あり余が推量の  
説き今を榛名の神人より官子申し榛名山あり神を式乃  
椿名の神の本宮は椿山あり神を里宮と定めらるるといふ  
然る上を我人ゆりたる官の制り後ひてをゆりたる  
榛名の祭神を先代舊事本紀一名大子双槻宮上毛國秦名山  
峯權現元湯彦命也 天照大神五代 依りて元湯彦命一名彦  
由文命 又彦湯支 古史傳 卷十 云

伊加保神社の祭神も今と湯前大明神といふも少毘古  
 那の神ありとぞ一説は元湯彦友命又の名彦由支命を申す  
 今此社の事記せる物に見えり元湯彦友命彦由支命と  
 つる神名古書未見當らば其を少彦名命の事と  
 名ありと覺也此社は並び椿名神社といふ社今椿名  
 山といふ山ありて俗に満行宮大権現といふ此神も元湯彦  
 命ありと社説あり 一説は中に伊弉諾伊弉册尊左右を國常立  
 尊大己貴命といふをけりけり或説は式  
 子椿の字を書けるを椿の誤  
 ありといふを然る説あり 今萬葉集より伊香保呂能蘇  
 比乃波里波良 傍の榛原あり榛名山の  
 地名より由りといふと云 云と  
 此古史傳の説より伊加保の祭神も一説を引きて元湯彦友命

今其を何書り據せり名榛名の社説と混じ誤せり  
 べし又神名少彦名命の別名ありといふも大成經の説  
 河原流知らざりし元来大成經も榛名の神を伊加保  
 の神と見たるや神名湯の字を用り又僧侶の守る  
 頃を満行宮權現満行將軍或を彦友尊美滿持尊植安大神  
 と稱し或を本地の地藏尊ありといふり又満行を佛經の  
 語より人名に附會し辛科縁起より書るを上野國西  
 七郡の領主群馬太郎満行を祭るを云又榛名由来記より  
 にも南部三郎満行瀧せり榛名より遠流せり此帝は怨を  
 奪りて伊香保の沼に入水を依りて其靈を祭るありと

伊香保新圖



その説はよく怪しく何れも取るに足らざる説どもあり此社を  
 建久年中の文書より既に榛名山寺の稱はつて早々より佛  
 氏の手より創建年月及縁起等も社を更へ傳へたと云  
 又案より大己貴命少彦名命の二神醫藥の事と始り給  
 ひが故に諸國温泉の地を必ふ二神を祭り佛氏垂跡  
 の説も薬師佛とある事何處の地も同じ伊香保道後箱根  
 伊豆有馬も皆此のめし又神名式より攝津有馬郡湯泉神  
 社にあり今も有馬湯山町の伊香保まゝと熱海もその神  
 と湯前明神と稱する事湯泉の轉るべきに欲  
 伊香保志中巻了



その説はよく怪しく何れも取るまじらざる説どもあり此社を  
 建久年中の文書より既に榛名山寺の稱ありて早くとより佛  
 氏の手より創建年月及縁起等も社を更と傳へばと云  
 又案より大己貴命少彦名命の二神醫藥の事と始り給  
 ひが故に諸國温泉の地を必る二神を祭り佛氏垂跡  
 の説も薬師佛とも事何處の地も同じ伊香保道後箱根  
 伊豆有馬など皆此のめし又神名式より攝津有馬郡湯泉神  
 社にあり今も有馬より湯山町の伊香保まで熱海もその神  
 と湯前明神と稱する事湯泉の轉るべき欲  
 伊香保志中巻了

明治十三年八月圖

中ノ三十五

地理圖

